

瑞牆山周辺の岩場の課題と展望

増 本 亮 (同人クライミングファイト)

山梨県北杜市、奥秩父の西の端に日本離れした景観を誇る山、それが瑞牆山である。突如として現れる林立した無数の花崗岩の岩峰群は、奥秩父のその他の山々とは趣を異にしている。クライマーによりロッククライミングの対象として登られはじめて50年以上が経ち、現在では国内最大級とも言えるクライミングエリアとなった。マルチピッチ、ショートルート、ボルダリング全ての分野において数多くのルートが開拓され、週末ともなればそれを楽しむクライマーで大変な賑わいを見せている。そしてさらには今なおそれぞれのジャンルにおけるルート開拓が積極的に行われている。そんな瑞牆山の尽きることない魅力に惹かれて、山梨県北杜市に移住するクライマーも多く、筆者もそのうちの一人である。ここではクライマーを惹きつけてやまない瑞牆山のクライミング史を振り返りつつ、その将来展望と課題について私見を述べさせていただく。

瑞牆山におけるクライミングの変遷

1926年、瑞牆山は日本近代アルピニズムの先駆者である大島亮吉により、日本山岳会機関誌「山岳」に瑞牆山の岩登りの舞台としての可能性が示唆された。だが、時代は穂高岳、剣岳、一の倉沢などの大岩壁バリエーションルート開拓期であり、この山に注目が集まるることはなかった。

時は流れ1960年代、穂高、剣、谷川の三大エリアの開拓も飽和状態となり、クライマーの関心はその他の未開の岩壁にも向けられ始めた。またこの頃開発された埋め込みボルトは不可能視されてきた節理

の無い一枚岩の登攀を可能にし、日本全国の岩場にボルトを積極的に使用したいわゆるボルトラダーのルートが数多く開拓される。

1970年代その波は瑞牆山にも押し寄せた。この山の無数の岩壁に、それこそ無数のボルトラダーが刻まれた。代表的なものに大ヤスリ岩「ハイピークルート」(1970年)、大面岩「正面壁北陵ルート」(1975年)、カンマンボロン「大ハングルート」(1978年)などがある。

そうした中にあって池学らによって拓かれた十一面岩正面壁「微笑返しルート」(1978年)は、単調なボルトラダーに終始するのではなく、クラック、スラブ、チムニーなどを繋げた今日的な内容だった。さらにこの壁の2本目のルート「春一番」(1979年、池学、田村実、渡部純一郎)ではラインはよりクラック中心のナチュラルなものとなり、グレードもVI級一という、当時としては先鋭的な数字が付され、新たな時代の到来を予感させた。(写真1)



写真1 植樹祭広場から望む十一面岩周辺の岩峰群

1980年大きな時代の変化が訪れる。戸田直樹らのヨセミテでの体験によって伝わったフリークライミ

ングのムーブメントが、日本全国に広まり一気にその時代の主流となった。そしてその動きは瑞牆山でも実践された。80年10月からおよそ3年間にわたって、戸田ら「グループ・ド・コルデ」のメンバーによって「春うらら」のフリー化を中心とした開拓が進められ、今もって国内クラッククライミングの聖地とされる「末端壁」が誕生した。

83年にはその「春うらら」を目指し一ヶ月間の山籠もりを行った、松江良三ら早稲田大学「山稜会」のメンバーによって、十一面岩正面壁「ベルジュエール」が開拓される。当時はほとんど注目されなかつた記録だが、現役大学生によって日本を代表するマルチピッチルートとも言える「ベルジュエール」が、グランドアップによって拓かれたことは驚嘆に値する。

その同時期には二つのチームが大規模な開拓を進めていた。一つは山本和幸ら「チームイカロス」のメンバーによって進められた大ヤスリ岩周辺のもので、5.10中心のフリールートを10本ほど開拓した。もう一つは清水博を中心とした「友達くらぶ」による不動沢の開拓である。不動沢登山道周辺に点在する屏風岩、不動岩、摩天岩など多くの岩壁群に、実際に数多くのルートが拓かれた。

87年にはその不動沢にも多くのルートを拓いてきた室井由美子、吉川弘によって大面岩に「フリーウェイ」が拓かれる。当時としてはかなりの高難度にあたる5.11のマルチピッチが、グランドアップにより拓かれたことは特筆すべき記録と言える。だが時代の移り変わりはあまりにも早かった。日本のフリークライミングはクラックを辿るトラディショナルクライミングからボルトを設置してのスポーツクライミングへと急速に全盛が移っており、「フリーウェイ」もほとんど注目されず再登者を迎えるには至らなかつた。

90年から91年にかけては、そのラペルダウンによるボルトルートの流行の流れを受けて、内藤直也ら

「チームたわし」のメンバーによってカサメリ沢の一大開拓が行われ、5.10～5.13aまで約100本のルートが拓かれた。しかし時代は二子山や鳳来、城ヶ崎などの前傾壁時代であり、今ほどの人気を博すまでは至らなかつた。

そのような時代背景もあり、90年代は瑞牆山が表舞台に出ることもなく静かに過ぎていった。少ない記録の中に、92年の大面岩「ニューモンタージュ」(中尾正樹・室井登喜男)、カンマンボロンの「ワイルド・アット・ホーム」(加藤泰平、室井登喜男、梅田茂光)があり、どちらも5.11代のマルチピッチで今では多くの再登者を迎えているが、前述の「フリーウェイ」同様当時はほとんど注目されなかつた。

転機は2001年に訪れる。瑞牆山が日本植樹祭の会場となり、林道工事や駐車場整備、遊歩道整備などが大々的に進められ、クライミングエリアへのアクセスも同時に大変良くなつた。その恩恵もあり再びこの山での新たなルート開拓が始まった。代表的なものは菊地敏行の「アレアレア」、「オーバー・ザ・レインボー」、「神の時代」、南裏健康・保恵による「現人神」、中尾正樹らによる植樹祭エリア、森山義雄らによる七面岩、馬目弘仁らによる小ヤスリ岩、角屋貴良らのクラック地獄などである。これらのお部は2004年6月の『ROCK&SNOW』24号に掲載されたが、瑞牆山がこのように雑誌に大々的に取り上げら



写真2 小ヤスリ岩を登攀するクライマー

2. 登山界の現状と課題

れたは実にカサメリ沢の紹介以来12年ぶりのことであった。(写真2)

このようにクライマーの目が再び瑞牆に向けられたのは単に日本植樹祭の影響だけではなく、ラペルボルトによるスポーツルートの開拓が一段落し、クライマーの意識が再びクライミングの原点に回帰し始めたことも大きな要因だろう。

同時期には室井登喜男によるボルダーラインの開拓が進められていた。ボルダーに関していえば、それまで着手する者はおらず、ほぼ未開拓の状態だった。無尽蔵に転がるボルダーを室井は10年以上の歳月をかけコツコツと集中的に、そして時には一ヶ月にわたる山籠もりを慣行し開拓を進めた。課題の総数は1200を超えるまでとなり、満を持して2011年『ROCK & SNOW』54号で大々的に発表された。このことが現在の瑞牆山に人が集まる最大の要因となっているのは言うまでもない。

再び脚光を浴び始めた瑞牆山では次々と新ルート、新エリアが開拓されていく。2007年、菊地敏行が大面岩中央のカンテラインに高難度マルチピッチスポーツルートの可能性を見いだし着手すると、兼原慶太、内藤直也らがそれを追うように参戦。2009年までに5.12～5.13という今までにない難度のマルチピッチルートを5本完成させるに至った。

さらに内藤は同時期、カンマンボロンの西面の急峻なフェースにも着目し、平山ユージ、小野寺賢治らと共に、5.13～5.14を10本近く含むルートが多数拓かれた。さらにその周辺の岩峰群にも内藤、小野寺、福田宗一郎などによって次々と新ルートが追加されていった。

このような大々的な開拓の裏側で、室井は一人静かに不動沢において自分の道を追及している。スラブやカンテなどほとんど節理のない岩を、ボルトレス、トラッドスタイルで20本近くのルートを拓いた。

グレードはほとんどが5.12～5.13と高難度で、それに国内ではなじみのないRやXなどの形容詞グレードのついたものばかりで、それらのルートからは強烈な初登者の主張が感じられた。

その室井の主張を受け継ぐかのように、中島渉によって不動沢に「二十億光年の孤独」5.13b/R(2013年)などのトラッドルートが拓かれた。また中島は父岳志、弟徹と共に天鳥岩「ホシガラス」(2010年)、大ヤスリ岩「ユグドラシル」(2008年)などを拓いており、いずれもミニマムボルトの精神が色濃く主張されている。

室井によるトラッドクライミングの流れを汲むものとして、2015年には倉上慶大により十一面岩正面壁に「千日の瑠璃」5.14a/RXが開拓される。全くと言っていいほど摂理のない一枚岩の十一面岩モアイフェイスがボルトレス、トラッドスタイルで登られたことは一大センセーションな出来事であり、誰も想像もしていなかつことだった。室井同様クライミングの本質を強く主張する登攀は、クライミング界に大きな衝撃を与えた。

時代は前後するが、2012年頃からは横山勝丘らによりアルパインクライミングの為のトレーニングとして、新しく拓かれた高難度のマルチピッチルートを中心に継続登攀が行われる。国外の大岩壁を見据えてのトレーニングは、時には一日でルート7本、50ピッチに及ぶものもあった。(写真3)

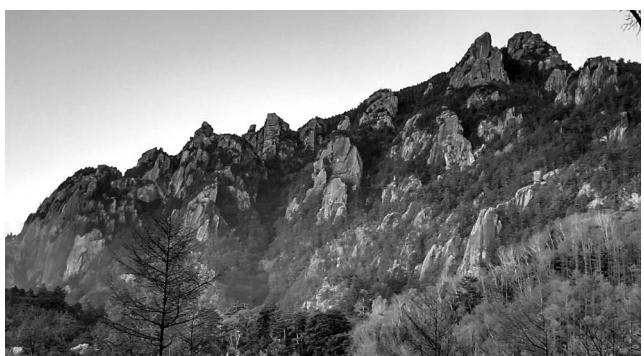


写真3 継続登攀の舞台となったパノラマコースの岩峰群

その後も瑞牆山では多くのクライマーの手によって数々のルートが生まれ、様々なジャンルにおいて現在進行形で開拓が進んでいる。近年では2021年中島涉による不動沢の「Humble」5.14a/R や村井隆一によるボルダー「Floatin」6段/V16が初登されており、いずれも国内最難クラスである。

大まかに駆け足で瑞牆山のクライミング史を振り返ってみた訳だが、それを見ると一つの大きな特徴に気づく。それは多様性である。多種多様なクライマーがトラッドルート、スポーツルート、マルチピッチ、ボルダーなどそれぞれのジャンルで思い思いのルートを開拓してきたことが分かる。そしてそれは現在も続いている。当然ながらそれらの拓かれたルートを楽しむクライマーも多い。ルートクライマー、ボルダラー、開拓クライマー、アルパインクライマーなど全てのクライマーが一つのエリアで共存しているのは国内でも瑞牆山ぐらいではないだろうか。オールジャンルでまだまだ可能性を秘めていることがクライマー達を惹きつけてやまない大きな理由なのだと思う。

課題と展望

ここ数年、瑞牆山自然公園の駐車場は、週末ともなれば満車の賑わいを見せている。ちゃんと統計をしたわけではないが、瑞牆山に来るクライマーの8割程度はボルダリングが目的ではないかと筆者は推測する。それだけボルダラーが増えたのは先に述べた室井氏の開拓したボルダーエリアの発表と、全国的なボルダリングの流行が大きな要因であろう。ボルダラーの増え方は爆発的と表現してもおかしくないほどである。(写真4) ルートやマルチピッチを楽しむクライマーも過去に比べるとボルダリングほどではないが随分と増えてはいる。こちらは2015年に発売された「瑞牆クライミングガイド」の影響が

大きいと思われる。この最大の変化とも言える爆発的にクライマーが増えたことによつて起きた事案を中心に、現在瑞牆山のクライミングが抱える課題とその解決策について考えてみたいと思う。

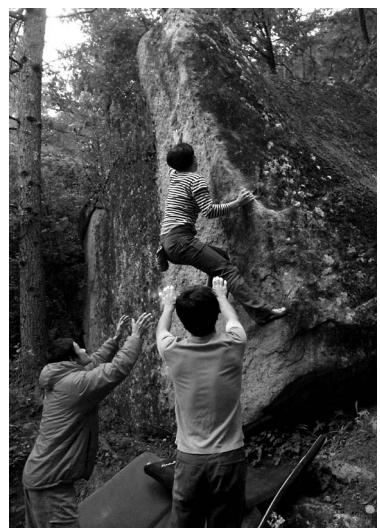


写真4 休日にボルダリングを楽しむクライマーはここ数年で一気に急増した

・駐車場問題

先にも述べたように週末には駐車スペースが無いような状態になっている。そうなるとどうしても路上駐車や路肩への無理な駐車が目立つようになる。現状では大きな問題に繋がっていないが、いつトラブルが起きてもおかしくない状態と言える。瑞牆山には当然ながらクライマーだけでなく、ハイカーやキャンパーなどその他の活動を楽しむ人々も多いものの、割合的にはクライマーの方が圧倒的に多いと思われる。クライマーの車で駐車場が溢れていれば、その人たちからクライマーへの反感が出てしまう可能性は高い。また12月上旬から4月下旬までのゲート閉鎖期間にも訪れるクライマーが増え、ゲートの前は車で溢れており無法地帯の様相である。現状では林道工事の車両や緊急車両が通行することは難しい。この件については、すでに地元住民の方々や工事関係者からの苦情が寄せられたこともあった。それらが膨らめば、登攀禁止などの厳しい措置に繋がることも十分考えられる。

クライマーは多数派でありついで気が大きくなりがちである。一人一人が譲り合う心をもって常識

2. 登山界の現状と課題

的な行動が求められる。駐車スペースが無ければ違うエリアに転進するなどの対応を心掛けたい。また積極的に挨拶を交わし、クライマー以外の方々との良好な関係を築いていきたい。

地元住民の方々にはクライマーの存在とクライミングを随分と周知していただいていると感じる。今後も積極的に地元の催しに参加したり、共同での周辺整備などを企画、実施し、さらにより良い関係を築いていくことが求められる。

・自然環境への影響、オーバーユースの問題

クライミングに限らず自然の中で行われる活動では、少なからず環境への影響を伴う。活動する人口が増えればその影響は当然増大する。ヒトも自然環境の一部として、動物、植物、水、地形など環境を構成する自然に対し敬意を払った行動が求められる。行き過ぎた伐採や、ごみなどの放置（特に使用後のトイレットペーパー）は厳重に慎まなければならない。

また十一面岩方面などのように人気エリアへクライマートレイルは、随分と荒廃してきており、対応が迫られる時期にきている。但し、瑞牆山は国立公園内でしかも特別保護地区に指定されている箇所もあり、簡単に整備は進められない。幸いにも北杜市はクライミングへの理解があり、観光資源として期待もある為、うまく北杜市と連携し国立公園を管轄する環境省との話し合いの場を設けることが、トレール整備への第一歩となるだろう。

・危急時の対応

車を運転する人が増えれば交通事故の確率が増えるように、クライマーの数が増えれば当然事故の数も増える。それはクライミングがリスクを伴う活動であるから仕方のないことではある。ただし当たり前のことだが、できる限りその危険をコントロール

し排除する意識や能力が求められる。

一昔前までは登山の延長線にクライミングがあつた。一通りの山登りを経験し、徐々にクライミングというより厳しい分野に足を踏み入れていくのが普通だった。だが現在はクライミングジムの普及により、ジムでクライミングを始めたのち岩場に行くという流れが主流となっている（特にボルダリングにおいて）。そこには危機管理能力に大きな差があると思われる。分厚いマットが全面に敷き詰められたジムでは当然ほとんど危険は排除されており、その能力は養えない。いくらクラッシュパッドを使用しても自然の岩場ではジムのように危険を排除することは不可能に近い。経験の浅いクライマーの事故の増加が懸念される。実際近年ではボルダリング中の事故による救急搬送の案件が増えているのは間違いない。それらの事故は登る能力が足りなかつことによるものではなく、危険を察知し回避する能力が不足していたことによると想像できる。

初心者は経験の豊富なベテランクライマーとの同行が望ましい。今後は初心者はベテランから岩場でのリスクの認識とその管理について学ぶ姿勢を持ち、ベテランは初心者を育てていく気持ちを持って事故防止に繋げて欲しい。

実際に事故が起きた際は、当事者や同行者によって対応するセルフレスキューが原則となる。クライマーは日頃から各人が危急時への対応について、様々な事案を想定しトレーニングしておくべきだろう。とは言え個人でそのようなトレーニングをすることはなかなか難しい。一昔前であれば大抵のクライマーは山岳会などの組織に所属しており、その組織単位でレスキュートレーニングを実施し危急時への対応に備えていた。近年では山岳会も衰退し、前述の通りクライミングジムからクライミングをはじめる人たちが増え、組織に所属しないクライマーが大多数

となった。そのためレスキュートレーニングのようなものは一切経験したことのないクライマーがほとんどだろう。そのような人たちを対象に、経験の豊富な者が講師となり、瑞牆山でクライミングするクライマー同士でセルフレスキュートレーニングを実施していけばよいのではないだろうか。

理想はセルフレスキューダーだが、対応が難しい場合は警察や消防に救助を要請することになる。まずは警察や消防にもクライミングという活動が、どこでどんな内容で行われているかを理解してもらい、エリアやアプローチ、危険箇所の共有を進めたい。その後可能であれば将来的には、ローカルクライマー等と合同での救助訓練を実施したいものである。

・支点の老朽化

支点の老朽化は瑞牆山に限らず日本全国の岩場で問題となっている。初登から30~40年経ったルートの多くもまったく整備されていないのが現状だ。その当時のボルトは径も細く、材質も鉄のことがほとんどで錆が進行し腐食しているものが多い。強度的に危険な状態にあることは間違いない。当然墜落の衝撃に耐えられない可能性も高くなっている。事故を未然に防ぐためにも早急に支点の打ち替えを行う必要性がある。(写真5)

だが先にも述べたように瑞牆山のクライミングエリアは、国立公園特別保護地区の範囲内にある箇所もあり、簡単に整備を進めることができないのが現状だ。国立公園の特別保護地区とは、自然公園法に基づいて環境大臣によって指定された特に優れた景



写真5 瑞牆山で見られる老朽化が進む支点

観を有する地区で、地区内では要許認可行為に加え、現状変更行為は原則として認められない扱いとされている。簡単に言えば、石ころ一つ動かすにも複雑な許可申請が必要ということで、現状設置されている支点はもちろんだが、クライミングという行為そのものも違法ということになる。それでも大きな問題となっていないのは、自然公園法の制定された1931年より以前から、北アルプスなどの特別保護地区内では既にピトンやロープを使用したクライミングが行われており、それを違法行為として禁止するのはナンセンスだったからではないかと推測する。全国各地に特別保護地区に指定されたクライミングエリアがあるが、現状は黙認状態と言える。

だが2016年には、岐阜県にある特別保護地区に指定された鬼岩公園で、天然記念物でもある鬼岩に打たれたボルトが、公園監視員によって警察に通報(くさびとして通報)され捜査が行われる事態となつた。もともと1980年代にはボルトは設置されており、2012年にその老朽化したボルトを自主的に打ち替えた男性がそのことを警察に名乗り出て、不起訴処分として解決している。以前からそこにあり使用されていたものを、善意で新しく交換した行為が法に問われ、さらにはクライマー以外の人たちから様々なバッシングを受けたことは衝撃的な事件だった。この一件をきっかけにいわゆる「くさび問題」として日本全国に波及し、各地の国立公園や国定公園で捜査や調査が行われた。幸いにも登攀禁止などに繋がるエリアはなかったが、特別保護地区ではその可能性を多分に秘めていることに脅威を感じた。このようなことから瑞牆山での支点の打ち替えも所定の申請手続きをもって進めなければならず、その手続きが複雑かつ困難であり、申請に許可がおりる見通しもないためなかなか着手できない実情がある。

根本的にはロッククライミングという活動を、一

2. 登山界の現状と課題

般社会及び行政に理解していただくことが重要になるだろう。登山道を利用して登山を楽しむ方々の安全を守るために、登山道の整備が行われるように、岩を登って楽しむクライマーの安全を守るために、支点の整備が必要なことを理解していただければならない。幸いにも北杜市はロッククライミングに一定の理解を示しており、申請を進める上で大変心強い。また2021年5月には自然公園法が、「国立公園等において、保護と利用の好循環を実現」のために一部法改正され、国立公園等の積極的な利用を期待し、一部の手続きも簡素化されるなど、我々にとって喜ばしい動向もある。

そもそもクライミングは自分のために登るのであり、支点の整備もそのルートを登りたい者がすべきというのが本来だろう。ただしそれはあくまで理想であって、現実的にはここまでして登ろうというクライマーはほとんどいない。整備には資材と専門用具、資金、労力、時間等が必要となってくる。なかなか個人が自分の時間を犠牲にしてまでそれらを負担することは難しい。瑞牆山を利用するクライマーのコミュニティで資金を調達し、労働力を確保する仕組みを構築できれば素晴らしい。そして日本フリークライミング協会と連携して、一日も早く作業を進めていきたいところだ。

おわりに

このようにいくつかの課題を抱えつつある瑞牆山のクライミングではあるが、その対応のために室井登喜男氏の呼びかけにより2020年に「瑞牆クライミング協会」が発足した。筆者もその構成メンバーの一人である。すでに北杜市、山梨県警察、北杜市警察、峡北消防本部などと繋がりを構築し、情報交換を行っている。合同でのレスキュー訓練やクライミング体験会などの企画も検討されているが、新型コ

ロナウイルスの影響により実施には至っていない。今後何かしらの問題が起こりうる可能性が大きくなる中で、瑞牆クライミング協会が発足したことは大変よいタイミングだったと思う。

実際に発生した事案や、起こりうる問題などには瑞牆クライミング協会が中心となり解決にあたることになるだろう。瑞牆山を利用するクライマー諸氏も、協会の活動に感心を示し、より良い瑞牆山のクライミングのために力を貸していただければ幸いである。

ありきたりな言い方だが瑞牆山はクライマーだけのものではない。森や川、岩、そこで仕事をする人々、そこで生活する人々、そこで様々な余暇を楽しむ人々など瑞牆山に関わる全てのものによって瑞牆山は構成されていて、クライマーもその一部である。それぞれがお互いの存在を認め合い、尊重し敬う心をもって活動すれば、この先も豊かな瑞牆山としてあり続けるのではないだろうか。（写真6）



写真6 日本離れした景観の中でのクライミングが瑞牆山の大きな特徴

クライマーは瑞牆山の自然と先人の遺してくれたものから多くのものを与えられて、成長し、それは今なお現在進行形で続いている。この魅力と可能性に満ちた瑞牆山を、より良い形で後世に引き継いでいくことも、今ここで活動する者に課された使命ではないだろうか。筆者も微力ながら、さらなる瑞牆山のクライミングの発展に尽力していきたいと思う。